

アベノ戦略 この道ばかり

表題と写真は中日新聞 9 月 29 日「特報」である。「選挙では経済政策前面」「国会ではタカ派姿勢」という見出しもある。リードから一安倍晋三首相が「新三本の矢」と称する経済政策を打ち出した。批判を浴びた安全保障関連法の強行成立から、国民の目をそらせようとしているのが透けて見える。来夏の参院選で勝利し、改憲に突き進む戦略を描く。だが、そもそもアベノミクスの旧三本の矢の効果は見え、新三本の矢の実現性も見通せない。

12 年に民主党から政権を奪還してから安倍首相は、選挙で毎回景気回復を掲げ、選挙で勝利すると、国民の反対が強い政策を打ち出して押し切るということを繰り返してきた。首相は来夏の参院選でも再び、経済政策を掲げて戦い、勝利することで、悲願の改憲を成し遂げる戦略を描く。24 日の記者会見でも「憲法改正を参院選の公約に掲げる」と明言した。現在、衆院で 3 分の 2 以上の議席を得ており、参院でも 3 分の 2 以上で改憲勢力が占めれば、国民投票の発議に持ち込むことも実現性が見えてくる。

1960 年のいわゆる「60 年安保」では、日米安全保障条約の改定をめぐる国会が紛糾。条約は参院の議決がないまま同年 6 月に自然承認になったが、安倍首相の祖父である岸信介首相は翌 7 月に総辞職した。代わって就任した池田勇人首相は、「所得倍増」などの経済優先の姿勢を打ち出す。同年 11 月の衆院選では 296 議席と、解散時から 13 議席を増やした。日本はそのまま高度成長期へと突入し、自民党の長期政権につながっていった。安倍首相もこの例にならいたいのだろう。だが、「首相の狙い通りにいくとは限らない」と指摘するのは、政治評論家の森田実氏だ。「安保で人気落ちるから、国民の視線をそらそうという魂胆が見え見え。アベノミクスで恩恵を受けているのは一部の人間のみで、経済政策として失敗していることも明らかだ」と話す。

60 年安保のときは、首相が交代したが、今回は安倍首相のまま。森田氏は「60 年安保では、タカ派の岸首相からハト派の池田首相に代わるという転換があった。今回は安倍首相の正しいと信じる改憲に向かって突き進んでいこう」とみる。東京大の醍醐聡名誉教授は「安倍首相が解釈改憲という形で、国のあり方を根本から変えるクーデターとも呼べることをやったことを、国民は決して忘れてはいけない」と指摘する。

全国で安保法に反対する広範な運動が高まった。「安倍首相は安保の季節から経済の季節へ転換したいという考えなのだろうが、安保の季節は終わっていない」森田氏も国民に呼び掛ける。「安倍首相はこれまで、経済政策を掲げながら秘密保護法や安保法を通した。その手にだまされてはいけない」

(2015 年 10 月 3 日)

